

神の超越性の反映を求めて：
「ハヴェル『間違いChyba』（1983年）試論」補遺

野 田 伊津子*

はじめに

拙稿「ハヴェル『間違いChyba』（1983年）試論」においては、第一に、劇作家ヴァーツラフ・ハヴェル（1936-2011）によって、チェコ民族およびスロヴァキア民族の歴史的な差異が同戯曲にいかんにか反映されているかを原文より確認した。第二に、George Theinerによる初の英訳において翻訳者の意図が原作者の意図を越えて混入されており、そこから論じられた1992年に発表の英語論文（Carey, *Living* 200-12）の一部に誤謬が生じてしまっていることを原文に沿って指摘した。正確な訳に従えば、実際は死刑判決ではなく私刑判決である点で、Careyが自論を進める威力に欠けてしまうことは否定できない。1977年に出されたTheinerによるMilan Kundera（1929-）とのインタビュー記事から察するに（Ambros 363）、Theinerは政治的な暗号から出来るだけ自由であること、かつ文学的な面白さを追い求めることに重きを置いたため、結果として原作者の意図を軽視することになったのではないだろうか。しかし、同じCareyによる1994年に発表された論文（Carey, *Face* 43-57）を本稿では扱うが、そこでは別の資料を補助に用いて検証し考察してあり、著者の主張は変わらない一方で思索が

* 金城学院大学キリスト教文化研究所客員研究所員

深まり、結果として説得力が格段に増している。第三に、自由のために戦って獄中にいるハヴェルのために書かれたベケットによる戯曲「カストロフィ *Catastrophe*」の背景とハヴェルの方向性との類似する理由を確かめた。第四に、米国作家テネシー・ウィリアムズにハヴェル「間違い *Chyba*」と同種の戯曲を見出し、両者を比較することによって、ハヴェルが「間違い *Chyba*」によって提示した主題の理解を深めることができた。

本稿は、本筋から離れているために前論に収録しきれなかった論点を拾い上げることによって、前論を補完することを目的とする。第一に、カレル・チャペックが人間に対して抱いていた考えが、どのようにハヴェルとは違うのかについて証左を上げる。第二に、キリスト教について哲学者レヴィナスによるハヴェルへの影響から「間違い *Chyba*」を論じる。第三に、劇場の政治性について、ハヴェルがプロパガンダ文学に陥らなかったのは何故か。また、ハヴェルがボヘミア・モラビア地方における歴史的事実をふまえ、劇中に民族の記憶を呼び覚まして警告していることは何かについて整理する。第四に、マサリク対ハヴェルでは、ともに資本主義体制をとるチェコスロヴァキア大統領に就任しながら、革命についての視座が異なることを明らかにする。マサリクと比較したとき、ハヴェルが革命に対して持つ考えは政治というより宗教的および内面的な色彩が極めて強く、その点でハヴェルにとって革命とは実は、聖書における霊的闘争¹にかなり近いニュアンスで理解されていたと思われるのである。第五に、前論に付した直訳について誤りを訂正する。併せて、囚人たちが用いるスラングについて、前論では言及しなかったチェコ語におけるジェンダー的な視点に関して付言する。これらは「間違い *Chyba*」においては傍流といえる論点であるが、明らかにすることで同国人または同時代人によるハヴェルへの思想的な影響を読み取ることができる。

¹ 「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」(Eph. 6.12)

ハヴェルによる原稿の底本としては、ハヴェル自身が大統領在位中1999年に編纂が始まった『選集Spisy』を信用に足るものとして用いた。

I. 先行研究

先行研究調査は前論で行った調査を引き継いでいる。和文はCiNii Articlesに対し著者名と戯曲名を鍵言葉として検索を行い、一篇も存在しないことを確認した。欧文は論文データベース (Web of Science, Ebsco host, Jstor, ProQuest) に対し、著者名Václav HavelにChyba (チェコ語原題), Mistake (英訳), Der Fehler (独訳), Tant pis (仏訳), Fout (蘭訳) をそれぞれ加えた検索を行った。これらは、いずれも各国語における「間違いChyba」の翻訳名である。場合によっては検索対象を絞るために、各国語で劇を意味する言葉を加えた。

II. ハヴェルはチャペック (1890-1938) に何を見たのか

広く知られている通り、第一次大戦後まもなくチャペックは新語「ロボット」を生み出した戯曲『ロボットR.U.R.』(1920年)によって一躍有名になる。その後、続けて兄ヨゼフと共作で『虫の生活よりZe života hmyzu』(1921年), 『絶対製造工場Továrna na absolutno』(1922年)を執筆した。この時期の作品群は、異世界、それは人造人間の世界であったり、虫の世界であったり、「神」を製造する機械がいる世界だったりするのだが、それらを描くことを通して、現実にある人間社会を批判している。これら第一次大戦直後に発表された作品には、大戦後の混乱が残る時代背景を反映してか、あまりにも加速して発展する科学への不信心、人間の運命への重大な懸念が表現されている。

一方、ハヴェルは自身が認める楽観主義者であり、自作が第一次大戦直

後のこれらチャベック作品の延長にあるというと仄めかされれば、動揺を隠さない。つまり、人間の運命についてのチャベックの悲観的な評価に対し、ハヴェルは全く賛成していないという事実がその背景にある。むしろ、ハヴェルは彼のそれぞれの作品においてチャベック哲学を否定し続け、人間が虫にしか過ぎないという神話を破壊しようとしてきたというのである (Czerwinski, *Jesters* 212)。確かにハヴェル作品は、「プラハの春」が無残な失敗に終わるまでは、人間賛歌と言ってもよい明るさに満ちている。人間が官僚機構における機械の一部のように扱われることを拒否する遣り取りが笑いを生む「ガーデン・パーティ *Zahradní slavnost* (Havel, *Spisy*2 37-100)」(1963年)、新造言語に振り回される人間模様を描く「覚書 *Vyrozumění* (Havel, *Spisy*2 101-96)」(1965年)、奇妙な質問を出す機械ブズクが印象的な「集中困難 *Ztížená možnost soustředění* (Havel, *Spisy*2 257-320)」(1968年)である。しかし、その不思議な明るさはどこから来るのであろうか。

かつて北杜夫 (1927-2011) は『どくとるマンボウ青春記』において、極めて個人的な感想として、戦時にかえって精神的に病む者が少なくなったことをあげている²。実際は、戦時という極限状態に抑圧されて、北杜夫自身も含めて、心を病む人の病状が表面化しなかっただけかもしれない³。戦争状態にあるときに安易に活動を停止させれば、生命を危険に晒すことになる。決して戦争を推奨するわけではないが、北杜夫が言うように、外部からくる危機が活動を低下させるような思考への忌避となって表れることは当然あるだろう。階級闘争という或る種の戦場において、ハヴェルた

² 「外界よりもたらされる危機は、逆に個人を安全にもするものだ。事実、戦争というものは、特殊な戦争ノイローゼを除き、ノイローゼ患者を減少させた。むしろ生ぬるい平和の中にあつて、我々は自己を攻撃しだすものなのだ。」(218)

³ 「そして謙遜をせずに本音を吐くと、私は精神医学の本は人並に勉強したし、かなり真剣に患者たちを診てきたし、なによりも私は家が脳病院で幼少期から狂人の間で育ち、あまつさえ私自身がけっこう精神病者に属している。」(234)

ち旧ブルジョア階級は国家レベルで標的とされていた。ハヴェルによるチャベック悲観主義への嫌悪に、チャベックには未だ現状を悲観できる余裕があることを感じ取ったハヴェルの直感的で本能的な自己保存欲求を筆者は感じ取らざるを得ないのである。ハヴェルから見ればであるが、チャベックは世界を悲観できたのである。悲観するということは絶望には未だ至っておらず、絶望に対して未だ少し余裕があるということで、未だ希望があるのである。世界に絶望するまでに未だ余裕がある人間に合わせるほどの余裕がハヴェルには無いことを、誰よりハヴェル自身が自覚していたからこそその拒否ではないだろうか。後年、ハヴェルは「再開発*Asanace* (Havel, *Spisy*2 857-940)」(1987年)で登場人物LUIAに夫BERGMANを次のように精神分析させている。

Dříve nebo později to pochopíš a uvědomíš si, že jsi vlastně celý složen jen z iluzí, náhražek a výpůjček a že už další klíny nejsou. V tom okamžiku se tě teprve zmocní skutečná beznaděj a skutečná touha umřít! A v tom okamžiku se také začnu teprve o tebe vážně bát – (Havel, *Spisy*2 888)

LUIAをして「(自分の酷い現実に気がついて) 本当に絶望するときが来たら、はじめて心配してあげる」と言わせている。そこには本当に絶望してしまう人への気遣いととも、まだ真実に絶望するまでに至っていないのに絶望しているかのような態度をとることへの忌避が見え隠れする。この後、夫BERGMANは泣き出してしまい、LUIAは直ぐ慰めているから、ハヴェルの中では忌避より気遣いの方が勝っているのであろうが。

チャベックはチェコスロヴァキア国家の創成期に立ち会うという幸運に恵まれ、若い国家とともに歩み、1950年代の異常な政治裁判も知らない。それ以前に、国家によって私有財産が何の補償もなく強制的に没収されるという想像を超えた経験もしていない。何よりチャベックはジャーナリス

トとして一定の発言の自由が確保され、それによって給与を払われるというハヴェルにとっては破格の待遇を受け、その職によって統治機構の頂点にいる当時の大統領と直接に会話し、その対話を著書として出版⁴することで大統領を間接的に支援することもできたのである。それら喜ばしい事象すべてがハヴェルにとってはチャペックへの距離感につながったことは想像に難くない。人権意識に基づいたDue process of law（法の適正手続）が確保されていて初めてお前の悲観は表明できたのだ、と言わんばかりである。そのような視点で見ると、ハヴェル初期作品における奇妙な明るさは、悲観する余裕を持ってはいられない人から滲みでる悲哀の裏返しにも感じられるのである。

Czerwinskiが主張するところによれば、チャペックとハヴェルとは「全体主義国家は気味が悪いほど遍在する、つまり、いつの時代でも、どこにでも存在する」という見解は一致していて、チェペックが人間の運命を悲観的に見ていることに対してハヴェルは別の選択肢を提供しただけだという（Czerwinski, *Poland* 390）。しかし、ハヴェルは見解が一致しつつも、単にチャペックと違う別の選択肢を提供しただけなのだろうか。この点においては、極めて個人的な感慨であっても、北杜夫による実体験に基づく記述に筆者は賛意を表さざるを得ない。ナチスがチェコスロヴァキアに侵攻して間もなく亡くなったチャペックは、兄ヨゼフに比して短命という不運はあっても、収容所に入れられるという悲劇は経験しなかった。ナチスであれ共産主義であれ、チャペックは全体主義国家を実体験としては殆ど経験していないのである。ここに共産主義による一党独裁政権下に進行形で生きていたハヴェルと、近くて遠い世界として全体主義が存在するに留まるチャペックとの歴然とした違いがある。劇作家として、一市民として、悲観する姿勢をとる余裕のないハヴェルが、自己を無力化させようとする

⁴ Čapek, Karel. *Hovory S T.G. Masarykem*. Praha: Československý spisovatel, 1990. Print. は邦訳がある。『マサリクとの対話』石川達夫訳（東京：成文社、1993年）

否定的な考えを振り払いながら表現活動をしていたと見るのが筆者には妥当のように思われる。

Ⅲ. 他者に出会う：自由意思を尊重して真実な愛を求められるとき

「間違いChyba」で重苦しい現実を描き出すことによって、戯曲自体には希望が感じられないかもしれないが、観衆に問題を悟らせるという手法をとったハヴェルが、哲学者レヴィナス（1906-95）に強い影響を受けていたことを示す資料がある。1982年5月に獄中からオルガへあてた手紙には、ハヴェルがテレビの向こうの無関係なはずの他者に感情移入して涙し、レヴィナスによる他者性についての考えを瑞々しい感情を伴ってなぞっている（Havel, *Spisy* 527-31）。レヴィナスによれば、殺人は「力を逃れようとするものに力をふるうことを練習」しようと試みる。しかし他者を殺すことは、結局、他者の抵抗のうちにあるのであり、知覚する者たちを超える何かに触れることはできない。殺人は殺される相手を失うまでしか到達することができないのである。殺人をそれほどまでに非難されるべきものとする人間の無限大に触れることはできない（Carey, *Face* 50）。分かりやすく言えば、対象を殺すことはできても、それはその対象の精神を得たことにはならないということである。もっと砕いて言うなら、Xibojを殺してしまっても、Xibojが監獄の中の他の囚人たちとは違っていたことを消すことはできないのである。存在を消してしまっても、その存在が持っていた既存の支配的価値観に与えた脅威を無くしたことにはならないのである。第二次世界大戦がそう遠くない時代に、ホロコーストを意識して述べられた哲学と思われるから（Carey, *Face* 55）、これを現代の卓近な例に変換して言えば、ストーカーを他者への歪んだ支配欲と捉えれば、ストーカーの末に対象を物理的または精神的に殺してしまっても、その対象の愛を得たことにはならないし、対象から何らかの尊敬や賛同や共感すら得た

わけでもないということである。ハヴェルは「間違い*Chyba*」を通して理想とは真逆の現実を描き出し、逆説的に何が必要なのかを観客に悟らせようとした。

Havel wagers on the audience's horror of the utter dehumanization that *Mistake* dramatized; in the explicit absence of transcendence, paradoxically, lies a witness to that which exceeds the mere measureable substance of the human. (Carey, *Face* 50)

神が不在であるかのように見える現実を完膚なきまでに描き出すことで、かえって人間にとってどれだけ神が、単なる物質だけの世界を超えた神の超越性すなわち*transcendence*が必要であるかに気づかせようとしたのである。観客は、劇中に非常に理不尽で一方的な獄中裁判と判決を見せられることによって、かえって単なる元素という物質の集まりではない、人間を人間たらしめる何かの欠如と同時に必要性に気づくように導かれる。神なき世界に生きることの異常さは、他者を他者として出会うことへの妨げにもなるのである。冷戦後のキリスト教社会倫理を論じたHollenbachは、「Most fundamentally, “real socialism” has failed because it was atheistic. In denying God, it denied the transcendent dignity of the person.」(Hollenbach 76)として、もっとも根本的に、「現実の社会主義」は無神論的であるがゆえに失敗した、神を拒否することで、「現実の社会主義」は個人の超越的な尊厳を拒否した、と述べている。

ここにキリストの最大の強さがあり、弱さのうちにこそ私の力は完全に現れると告げられた使徒パウロの現実がある⁵。キリストは相手の意思を無視して催眠術で弟子をつくったわけでもないし、キリストの周りに集まっ

⁵ 「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(2 Cor. 12.9)

た人々は調伏して連れて来られたわけでもない。他者として出会い、存在を受け入れられ、愛されている喜びに突き動かされた人々が自由意思でキリストの周りに集まったのである。弱さを弱さのまま受け入れる困難は人間ならば容易に理解できる。いや、時には強い者も受け入れることは難しい。人間は自己と異なる他者を他者のまま受け入れることが難しいのである。それが聖書の言う、神中心ではない自分中心という罪、いわゆる原罪である。原罪(自分中心=的外れ)に支配されて全ての基準が自分であり、その自分中心の基準に照らして神がお造りになった他者を計り見るからである。しかし、キリストは人間が見るようには他者を見ない。人と同じ肉体をとられはしたが⁶、神の子として父なる神の雛形を人間に示されたのである。

ところで、世界にただ一人しかいない自分を真実に知るのは誰だろう。親だろうか、友人だろうか、自分自身だろうか。本当に世界にただ一人しかいない自分は、全知の神にしか知り得ない自分ではないだろうか。その自分が知られていることを知ってはじめて、人は安心していられるのではないだろうか。神のまなざしの中ではじめて人は自分という他者にも出会えるのではないか。自分という他者に会っても動じないでいられる平安は、真実に全てを知っておられる神からの愛なくしては得られないのではないだろうか。自分を何もかも知って愛してくださる、尊重してくださる愛にふれて初めて、ありのままに受け入れられている喜びを知る。もっとも身近でありながら最大の不思議である自分を恐れなくてもよくなった

⁶ 「確かに、弱さのゆえに十字架につけられましたが、神の力のゆえに生きておられます。私たちもキリストにあって弱い者ですが、あなたがたに対する神の力のゆえに、キリストとともに生きているのです。」(2 Cor. 13.4)

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」

(Heb. 4.15)

「彼は、自分自身も弱さを身にまっていますので、無知な迷っている人々を思いやることができますのです。」(Heb. 5.2)

ら、神と同じ水準にはなり得なくても、どのように他者と出会い、どのように他者を受け入れればよいかに導かれていく。それは、ちょうど親の模倣をしながら子が人付き合いを学んでいくことに似ているだろうか。

それはギリシャ人が分類した神の愛（アガペー）以外の愛、すなわち性愛（エロス）、友愛（フィリア）、家族愛（ストルゲー）を否定しているわけではない。否定ではなく、おそらく完成させてくださるのである⁷。キリストを知らず且つ常識がある人から見て、キリスト者が何か厳格な徳徳のうち偏りのあるものとして生活することを理想とすると聖書が教えていると考えるなら間違いである。むしろ、正面から聖書を通読すれば、神の手のなかで最大限の喜びを得て生きてほしいという願いに満ち溢れている⁸。世の中で生活することも神のため、修道院に入ることも神のため、信仰によって喜んでするのなら主の前には価値がある⁹。聖書とは、中途半端な喜びで満足しないための指南書とも言える。あたかも一流シェフが準備するように、神が用意してくださる料理は出てくるまでに時間がかかることが多いけれど、待つ価値があるのである。

ただし、無銭飲食が犯罪であることと似ていて、神の前に良しと認められる望みならば信仰による確信を持って待つことができる¹⁰というだけなのである。何が良しとされ、何が良しとされないのか、その基準を、聖書を通して聖霊を通して神は教えてくださっている。そしてときに、その待つ時間を通して、私たち自身がその望みに相応しいように神が私たちを整

⁷ 「あなたの若い時の妻と喜び楽しめ。」(Prov. 5.18)

「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」(Matt. 5.17)

「愛は結びの帯として完全なものです。」(Col. 3.14)

⁸ 「愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康であるように祈ります。」(3 John 1.2)

⁹ 「信仰から出ていないことは、みな罪です。」(Rom. 14.23)

¹⁰ 「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」(Heb. 11.1)

えておられるのである。

それでも神の偉大さ素晴らしさは、本当に必要ならば代価なく与えてくださるという世の中の常識では全く信じられない溢れる豊かさである。第一、魂の救いはキリストが代わって支払ってくださった^{あがな}贖いに依拠しているのだから、どれだけ大盤振る舞いだろうか。私たちに求められているのは、ただ神の真実を信じて受け取ることだけというのは、どれだけ大きな愛なのだろう。にもかかわらず、神は礼儀正しく、戸の外に立って扉が開かれるのを待っておられる。私たちの側から扉を開けられることを待ち、こちらの意思に反して扉を開けたりなさらない。聖書は神の言葉を預かって伝えている。

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところに入って、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

(Rev. 3.20)

パウロは自分がキリストから直接に、ある意味で半強制的に召集をかけられ¹¹、また、それ以後にも神より特別に素晴らしい啓示を受けたために¹²、おそらく神の力に対して圧倒的な強さという側面を感じていたと想像する。加えて聖書に収められたパウロの自己紹介によれば¹³、彼は唯のユダヤ教徒ではなく、熱心なユダヤ教徒であり、少なくとも旧約聖書(当

¹¹ キリスト者たちを懸命に迫害していたパウロ(当時はサウロ)にキリストは天から直接に声をかけ、他の兄弟をも用いて導き、ご計画に基づいて、かえってキリストを熱心に伝える者に変えてしまわれたのである。(Acts 9.1-20)

¹² パウロ自身が控えめに告白している。(2 Cor. 12.1-7)

¹³ 「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。」(Acts 22.3)

時の聖書)を熟読して神に関して知識が豊富であったことは確かであろうから、人智をはるかに超えた力の側面から神をとらえていたのは不思議なことではない。現代でも、示される側面のあまりの違いに、旧約聖書の神と新約聖書の神が同じ神であることを直ぐには受け入れられないと感じる人も少なくない。地上にいる人間にも理解できるように神がご自身を、その愛の側面を示されたというのは、やはり奇跡なのだ。パウロにとって受け入れがたいこともあったかもしれないが、神がお定めになった現実に基づいて、キリストを宣べ伝えるときには、キリストが他者の魂を真実に求められたように、相手を調伏しかねないような強さではなく、一見すると弱さともとらえられかねない愛による忍耐が求められたのである。

IV. 劇場の政治性について

一般に、特定の思想を宣伝するために道具として文学を用いた作品群を「傾向文学」あるいは「宣伝文学」という。純文学に対置される存在であり、日本では明治前期の政治文学、昭和初期のプロレタリア文学が例としてあげられる。イデオロギーについて敏感な時代には、教訓にすることを意図して政治問題をドラマ化すべきだという期待に対して、ハヴェルは強く抵抗した。実体験から、特定の政治問題を強調することではなく、むしろドラマの持つ政治性そのものを強調することを選んだのである。

Indeed, all I know about the history of the theater and everything that my modest experiences as a dramatic author have taught me confirm for me that the best theater is and always has been naturally political. Political, I repeat, in the *broadest and truly serious sense of the term* ... The theater is not therefore political according to the political power to which it bows or the politics that it proclaims, but according to how deeply it mirrors and reflects the social happenings

of its time, raises, formulates and demonstrates the social problems of its contemporaries and is able to observe its themes through the prism of the sensibility of its age. (Quinn 64)

何か特定の政治問題を取り上げて、作家の意図した回答に観客を導くというような宣伝文学に属した創作活動を行わなくても、むしろ同時代の現実を優れて反映した作品であればあるほど、その時代の社会問題を取り上げ、形成し、指し示して、時代の感覚を通して、早い話が観客の反応を通して (Ambros 367) 主題を観察させてくれるというのである (Quinn 64)。ハヴェルの方法は、特に「プラハの春」以降は顕著に見られる傾向だが、劇場は教会と違うのだから、時にはデフォルメしてでも現実を悟らせ、観客に衝撃とともに自覚と行動を促すのである (Havel, *Spisy* 4 909)。

At no other time in the play is the audience ever acknowledged; the final moment is clearly a call for responsible political action, a gesture of appeal which asks the audience to recognize the “politicality” of their presence as witnesses in the theater. (Quinn 71)

劇場で最後には観客たちは責任ある政治的行動を求められ、観客が劇場で見聞したことの証人として、観客が自分たちの存在の「政治性」を認識するように求められる (Quinn 71)。

Připomenout lidem jejich dilema, zdůraznit význam odsouvané otázky, předvést, že je tu skutečně co k řešení. Postavit člověka před něho samotného. (Havel, *Spisy* 4 910)

戯曲を鑑賞することを通して、人を自分自身の問題に直面させ、自発的に答えを見出させ、行動することを促すことがハヴェルの作家としての使命だった (Havel, *Spisy* 4 910)。

こうしてハヴェルは、劇作を通して、歴史的な観点から同胞に共有されている政治記憶を呼び起こし、警告を与える。主に二つ挙げられる。一つはカリスマ的な政治指導者に依存することが結局は、チェコにおいては殉教か政治的な継続性を危険にさらすという失敗への道であったこと。これは「プラハの春」が起こる前からハヴェルが多党制を擁護してきたこととも矛盾しない。

Perhaps the clearest answer is in the absence in the play of anything like the Western-style democracy one might expect to be dramatized--especially by a dissident like Havel who has publicly advocated a multi-party system since before the Prague Spring. The Czech and Slovaks, even in their rare moments of free government, have not been good at the sort of contained, institutionalized disagreement that fuels successful democracies. Instead they tend, as I have pointed out in an essay on Havel's political reception, to follow a tradition of charismatic leadership that has been disasters to their political continuity---it results, in fact, in a history of martyrdom and political failure for Czechs, and tendency toward Fascism in Slovakia. (Quinn 72)

もう一つは、「プラハの春（1968年）」「フス反乱（1419-36年）」に象徴されるように、自由になったことに余りにも驚いてしまい、自由を維持するために十分な計画を立てることができなかったことである（Quinn 71）。この点は「間違い*Chyba*」では言及されておらず、「再開発*Asanace*」第三幕終わりに、一日も保たない儂い吉報を挿入することで、観客に鋭い痛みを味わわせている。しかし、ハヴェルは劇半ばという位置にこの出来事を入れることで、かつてあった革命は、一度は確かに終わってしまったが、再び別の革命が起こるかもしれないという希望を灰めかすことを忘れてはいない（Quinn 71）。ただ現実を見せて行動を促すだけだと言いながら、

「間違いChyba」よりは少々光がある。釈放後にすぐに書かれた「間違いChyba」に対して、「再開発Asanace」がそれより数年して書かれたという違いだろうか。獄中の記憶が生々しい釈放直後には、観客に希望を与える要素を入れる余裕などなかったのであろう。

V. 革命はどこで起こるか — ハヴェルがマサリク(1850-1937)と交わらない理由

マサリクが学者として出発し、数々の選挙および第一次世界大戦を経て、自ら確信をもってチェコスロヴァキアを独立まで導いていった道筋とは対照的に、ハヴェルが運命の悪戯のように見える逆説の中で大統領（結果として政治家）となったことを見落としてはならない。マサリクにとって政治家として目的を達成するための手段は常に明白であった。選挙に勝つこと、国内外に味方を増やすこと¹⁴、政治力学を考えながら理想とする目的を達成していったのである。そのためには、極めて不本意ながら結果として家族をも犠牲にしながら¹⁵。

一方、ハヴェルは劇作家として自分が自由に表現したいという、かなり個人的かつ内発的な動機によって出発し、突き動かされており、そのために望むと望ままいと関わらず否応なしに政治闘争に巻き込まれていったという現実がある (Sebestyen 66-67)。ハヴェル自身が革命を目指したのではなく、表現者として自由を求めて苦闘して前進していくなかで東欧革命が起こり、その結果、本人としては思いもかけずドプチェクDubček (1921-

¹⁴ 支援を求めてマサリクは、1918年に日本にも立ち寄っている (Hayashi 6-11)。

¹⁵ 石川達夫が『マサリクとの対話』訳者あとがきで解説している。「第一次世界大戦中、国外で反オーストリア・独立運動の指導者となったマサリクは、ついに独立を達成して、「祖国の解放者」にして大統領としての栄光に包まれ、国民に熱狂的に迎えられながら祖国に帰ってきたが、まさにその反オーストリア・独立運動のために、オーストリア国内に残っていた彼の家族は様々な迫害を受け、最愛の妻シャーロットはついに精神に異状をきたした。そしてマサリクが帰国してからも妻の精神病は直らず」(Čapek, Masariku 333)

92) が座るだろうと思っていた椅子に導かれたという感覚であつたらう¹⁶。祖国の状況を憂え、「ブラハの春」がワルシャワ条約軍によって潰された後に小説家クンデラ（1929-）と小民族の存在意義を問うて小民族論争を繰り返しても（Sabatos 1827-45）、それは劇作家という立場からであった。受け身とも言える状態で政界に突入したために、劇作家という芸術家として精神的な価値を追い求め、国民に目指すべき理想を示すことは得手でも、現実的な利害関係を調整することに関しては困難をともなったことは想像に難くない（Žižek 3-6）。ハヴェルにとって本来、革命が起こるべき場所は外界ではなく、人間の心の中なのである。精神の中に変化が起これなければならぬとするハヴェルの主張が、全く畑違いの教育学における論文（Smith 72）に、また精神面を重視したリーダーシップ論集¹⁷に援用されている。加えて、ハヴェルは1990年にアメリカ議会で次のように演説している。

The specific experience I'm talking about has given me one certainty: consciousness precedes being and not the other way around as Marxists claim. For this reason, the salvation of this human world lies nowhere else than the human heart, in the power to reflect, in human meekness, and in human responsibility. Without a global revolution in the sphere of human consciousness, nothing will change for the better in the sphere of our beings as human, and the catastrophe toward

¹⁶ 1989年11月24日、ドプチェクが隠遁生活をしていたブラチスラヴァからブラハへ、革命のために集まった群衆の前に戻ったとき、民衆は既に「ブラハの春」のときのように社会主義には希望を繋いでいなかった。「ブラハの春」は、社会主義は改革できる、社会主義には未来があるという希望の中で起こったのである。その希望は「ブラハの春」が潰された後のソ連による「正常化」時代を経て二十年間のうちに跡形もなく破壊され尽くしていた。ドプチェクが依然として社会主義の未来を語ったとき、意図せず過去の人になってしまったのである。決定的な瞬間に、ハヴェルは社会主義への失望を隠さず表明したのであった（Meyer 186-89）（Sebestyen 377-79）。

¹⁷ Conger, Jay A. 『仕事にあたる心構え：リーダーシップにおける精神性を求めて *Spirit at Work: Discovering the Spirituality in Leadership*』では、ハヴェルが西側リーダーシップに与えた精神面での影響について触れられている。

which this world is headed--be it ecological, social, demographic or a general breakdown of civilization--will be unavoidable.

(Havel, *The Revolution* 14-15)

自らの経験から得た確信に基づいて、人間精神における世界革命¹⁸なくしては何も良くなるないとハヴェルは言い切る。それは的外れではないが、政治家の言というより宗教指導者に近い主張であることもまた否定できない。なぜなら、同じく「世界革命Světová revoluce」¹⁹にマサリクが言及するときは、精神的なものを全く除外してしまうわけではないけれど、ハヴェルとは対照的に自分の外界に革命の対象があり、その対象に対して思索が深められていく。劇作家と学者という出発点が違う二人が、何を変革すべきかという点で微妙に交差はしても交わらないことについて、本稿の範囲内で述べた。あるいは、いずれかで交わる点があるかもしれないが、そのためにはハヴェルが1990年に新年の挨拶で国民に向かって述べたように(Havel, *Spisy* 6 15-19)、コメンスキー(1592-1670)の時代まで遡る必要があるかもしれない。この挨拶でハヴェルは、チェコスロヴァキア大統領としてマサリクの継承者であることを意識すると同時に、図らずもコメンスキーを両者の共通の基点として言及しているのである。

¹⁸ 知られているように、この世界革命という言葉自体は元来、マルクス主義者たちが用いた術語で、ロシア革命以後の内部における分派闘争の中でクローズアップされた。マサリクもハヴェルも、どちらかと言えば程度の差こそあれマルクス主義者たちに目の敵にされた側だが、自らの考えを述べるために術語を借用している。この術語の発展方向の一つとして、ウォーラーstein(1930)「世界システム論」が一般に定置されている。

¹⁹ マサリクが自らの経験と考えを『世界革命：戦前と戦中1914年から1918年まで *Světová Revoluce: Za Války a Ve Válce 1914-1918*』で表している。邦訳は無い。チェコ民族の歴史を基軸に、当時の先進国を視野に入れて、チェコスロヴァキア独立に前後した各国の政治力学を具体的な日付とともに記録し、最終章「民主主義と人間性」でようやく抽象的な概念に議題が及ぶ。しかし終始、マサリクの思考が政治と共和国を離れることはない。

Ⅵ. 翻訳に関する訂正と付言

前論において、誤解を避けるために出来る限り直訳に近い翻訳を心がけたが、囚人が用いるスラングを中心に誤りがあったので訂正する。ピアニストとしてチェコに七年間に渡って留学し、現在は通訳もなさっておられる榊原祐子氏に拙訳を検証いただいた。「間違い*Chyba*」で使用されている特殊用語は、ハヴェルが直接に囚人から聞き取りした経験が随所に窺われ、本来は実際に監獄経験があるチェコ人に発音を含めた検証をしてもらう必要はあるというご助言を賜った。ただ、それは現実として調整が難しいため、一般チェコ人も使用するスラングを中心に見ていただいた。しかし、それは筆者の翻訳に関する責任を免除するものではない。翻訳の最終的な責任は筆者にある。指摘していただいた中には手元の辞書または資料で確認できなかった箇所もあり、確認できた部分に限って訂正する。併せて、その過程で判明したチェコ語におけるジェンダー事情について付言する。

訂正に入る前に、まず文中に口語表現が散見される点を確認する。例えば、*prý* [～らしい] は*prej*となり、*umýt* [洗う] は*umejt*となり、*každý* [毎～、それぞれ] は*každej*となり、*zítra* [明日] は*zejtra*となっている。これらは文語表現とは異なり、口語として使われる。これらの口語表現からは、話者が相当に育ちが悪く、場所が監獄であることから、かなり危険な重い罪を犯して取監されたことが推測されるのである。

A. 訂正

訂正箇所は次の通りである。47ページ13行目、*po budičku*は「*budíček*起床サイレン」の後という意味なので、「起きた後に」ではなく、「起床サイレンの後に」が正しい。48ページ15行目において、不要な*v*を語頭に伴って*odsrat* [うんこする] 過去形の三人称複数*odsrali*が使用されているが、これは文字通りの意味ではなく、途方もなく馬鹿なことをしてしまった場合に自虐的な表現として「俺、馬鹿なことしちゃったよ。(俺は糞をした＝俺はクソだ) *Seru.*」とする意味に近い。よって、筆者が49ページ15行目において「そして我々全員は自分の順番の時に小便するために」と訳した箇所は「もしそういう奴がいたら(問題外だから)、そいつに皆でクソするように」という訳がより正確となる。49ページ2行目「洗濯」は「洗顔」である。洗うという意味の単語*umejt*は、この箇所では洗濯までの意味は含まれていないようだ。50ページ22～23行目「その時間のお蔭でそれを換気して、それによってお前は寝ている」は、「むしろ、その時間で換気する」が正確である。次に53ページで*cent'áky*を「インチ」と訳したが、*cent'áky*は、*cent'ák*および*cent'áček*複数形で「センチ」が正しい。センチメートルには*centimetr*というチェコ語があるが、それとは同意義の別単語である。ある種のスラングで広くは使用されていない。ウェブ上にある特殊辞典によれば、軍隊で使われていた可能性がある。54ページ5行目には*zvyk*という単語があるが、*zvykl*の*l*が抜けたスラングなので、6行目の訳も「誰もがそれらの事に慣れる」ではなく過去形で「誰もがそれらの事に慣れた」が正しい。54ページ19行目に*bengové*を訳し忘れていたので、55ページ2～3行目「懐中電灯」の前に補って「看守の懐中電灯」が正しい。*mít kliku*は「ドアノブを持つ＝運が良い、ついている」なので、55ページ4～7行目「今日は怖い事があった、お前がドアノブを握っていやがるんだが、ここに一日中、警察が居なかった。」は、「今日は酷かった。お前は運が良い。というのは、今日は一日中、看守が居なかった。」がより正確である。55ペー

ジ下から4行目「この部屋の中で誰もつかまえない」は、「この部屋の中にいることさえできない」が正確である。56ページ11～12行目ze mě někdo dělá vola は「雄牛vůlをdělatする＝バカをやる」なので「誰かが俺様が原因でバカをやる」となり、13～14行目の訳「誰かが俺から雄牛を呼ぶのが、好きじゃないんだよ。」は「誰かが俺様が原因でバカをやるのが好きじゃないんだよ。」が正しい。その直後にあるJenomže mě jen tak nevytociš!を訳し忘れてあるので、その訳を追加して「俺をこんな風に怒らせない限りでな！」となる。15行目seskocはタイプミスで、正しくはseskočである。

B. ジェンダー視座より

男女双方に対して使用する罵り表現に対して、女性名詞を用いた比喻が使われている。文脈からは日本語で言う「女の腐ったような奴」と似たニュアンスを感じるが、論拠を示す文献は、現在のところ未発見である。「間違いChyba」で出てきた代表例は「píča売女／女郎^{めろ}」である。それ以外にも罵り表現として「kurvaくそ／させ子／じゃじゃ馬／売春婦」「kráva雌牛」があり、男性に対しても堂々と使用されるが、全て女性名詞である。辞書を引くたびに違和感があった。人口に膾炙して既に具体的な意味をなさなくなっているのかもしれないが、母語として幼児がチェコ語を学習していく過程で意味を知った時に、いくら罵り言葉であっても不要な差別意識が身につかないだろうか。男女双方を対象とする罵り言葉に、なぜ女性あるいは性別が雌の動物名を使用しなくてはいけないのだろうか。英語にも女性を用いた罵り言葉は多数ある。男性を罵るために女性を貶める言葉を使用するのは、例えば「この野郎（直訳すれば「雌犬の息子」）son of a bitch」があるが、男性に対して直接にbitchを使用する場合も確かにある。意味を記すことは控えるが、相当にひどい意味である。ということは、チェコ語に限らず罵る場合には、相手に対する優越性を誇示するために、相手を自分より弱いもの劣ったものとして形容するのであろう。そのために、

女性を貶めた表現を男性に対しても使用することは想像に難くない。この点に関しては言語学の範疇に入り、先行研究を調べていない。チェコ語においても英語と同じ現象が見られるということを記して筆をおく。

結びにかえて

前論を補完するために、以上五つに論点を纏めて述べた。結果としてハヴェルに影響を与えた同時代人の存在が浮かび上がった。また逆にハヴェル自身が影響を与えた人々をたどることで、彼が抱く理想が政治指導者というより教育者および宗教指導者に近かったことに驚かされた。東欧における1989年とは、時代の要請によって従来とは全く違う型の政治家が求められていたことは確かのようにある²⁰。しかし、それはチェコスロヴァキア国民にとって必ずしも心地よい言葉を投げかけてくれる指導者ではなかったことをも意味する。ハヴェルは国民に対して、1968年から1989年の間に起こったことについて、国民は単なる旧ソ連による歴史の犠牲者ではない、責任があるということを語った (Sebestyén 403-04) のである。そして、さらに居心地の悪いこと、つまりチェコスロヴァキア国民が被害者ではなく加害者として、ズデーテン地方に居住していたドイツ人たちに第二次世界大戦後に不当な扱いをしたことについて赦しを求めるようにと告げた (Deak 44)。自らが相対的に弱い存在であるからといって、その弱さを笠に着て自国がなした不正や悪を看過させようとはしなかったのである。もはや、これ以上の言葉は不要であろう。ハヴェルは指導者として、愛国者

²⁰ 佐々木和子が『ハヴェル自伝』訳者あとがきで、ビロード革命たけなわの頃に聞いた知人のチェコ老婦人の言葉を引用している。「この二〇年間、この国で生きてゆくには、自分の主張を殺して、信仰を隠して、権力に忍従して、多少とも精神的な奴隷になることを強いられた。それどころか、そういう環境に慣れきっている風潮もあった。このままいくと、かつてのモラルは崩壊してしまう。いまわたしたちが一番必要としているのは、この国の尊厳を取りもどし、荒廃したモラルを立てなおしてくれる人だ、それにはハヴェルしかいない、そう思うようになった」(Havel, *Haveru* 333)。

として、語るべきことを避けなかった。一個人として自由に表現したいという内発的な動機から出発し、共同体の利益を考えるに至った経緯は極めて複雑であるが、自国民に忌避されやすい難しい問題を避けなかったことで確かに国民の期待に応えたと言える。元々は政治家になることを望んではいなかったことからくる大胆さもあったかもしれないが (Meyer 206)、誠実であろうとしたことは確かである。

例えて言えば、患者が望まないことでも健康のためには医者が最善の方法を勧めるように、ハヴェルは国民に真実を尽くしたようだ。結果、十三年間に渡って大統領として国の顔となったのであろう。

引用文献

- Ambros, Veronika. "Daniela Fischerová's New Palimpsest between "Living in Truth" and "the Battle for an Island of Trust".” *Canadian Slavonic Papers* 36.3 (1994): 363-76. Print.
- Beckett, Samuel. *Solo: Suivi De "Catastrophe"*. Paris: Éd. de minuit, 1982. Print.
- Carey, Phyllis. "Face to Face: Samuel Beckett and Václav Havel." *Christianity & Literature* 44.1(1994): 43-57. Print.
- . "Living in less: Vaclav Havel's Drama." *Cross Currents* 42.2(1992): 200-12. Print.
- Conger, Jay A. *Spirit at Work: Discovering the Spirituality in Leadership*. San Francisco: Jossey-Bass, 1994. Print.
- Czerwinski, E. J. "Jesters and Executioners: The Future of East European Theater and Drama." *Comparative Drama* 5.3 (1971): 207-25. Print.
- . "Poland and Czechoslovakia: Open Underground Theater and Drama." *Books Abroad* 46.3 (1972): 387-92. Print.
- Čapek, Karel. *Hovory S T.G. Masarykem*. Praha: Československý spisovatel, 1990. Print.
- . *Masariku Tono Taiwa*. Trans. Tatsuo Ishikawa. Yokohama: Seibunsha, 1993. Print.
- . *Robotto/Mushi No Seikatsu Yori*. Trans. Akane Kurisu. Tokyo: Kaizansha, 2012. Print.
- . *Robotto: R.u.r.* Trans. Eiichi Chino. Tokyo: Iwanami Shoten, 1989. Print.
- . *R. U. R. - Rossum's Universal Robots*. Praha: Aventinum, 1920. Print.

- . *Továrna Na Absolutno: Román-feuilleton*. Brno: Polygrafie, 1922. Print.
- . *Zettai Seizo Kajo*. Trans. Itaru Iijima. Tokyo: Heibonsha, 2010. Print.
- Čapek, Karel, and Josef Čapek. *Ze Života Hmyzu: Komédie O Třech Aktech S Přederou a Epilogem*. Praha: Aventinum, 1921. Print.
- Deak, Frantisek. “A Playwright for a President: The Story of Moral Renewal.” *Performing Arts Journal* 12.2/3 (1990): 36-44. Print.
- Havel, Václav. *Der Fehler*. Trans. Joachim Bruss. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, 1983. Print.
- . *Fout*. Trans. Sjoerd de Jong. 's-Gravenhage: Stichting Nederlands Dramatisch Werk, STINEDRA, ca.1983. Print.
- . “Garden Party.” Trans. Shimako Murai. *Senro No Ue Ni Iru Neko: Gendai Cheko Gikyokushu*. Tokyo: Shichosha, 1969. Print.
- . *Haveru Jiden: Teiko No Hansei*. Trans. Kazuko Sasaki. Tokyo: Iwanami Shoten, 1991. Print.
- . “Mistake.” Trans. George Theiner. *Index on Censorship*. 13.1 (1984): 13-15. Print.
- . “The Revolution has just Begun.” *Time* 135.10 (1990): 14-15. Print.
- . *Spisy: 2*. Praha: Torst, 1999. Print.
- . *Spisy: 4*. Praha: Torst, 1999. Print.
- . *Spisy: 5*. Praha: Torst, 1999. Print.
- . *Spisy: 6*. Praha: Torst, 1999. Print.
- . “Tant pis.” Trans. Erika Abrams. *Hôtel des Cimes: suivi de Tant pis*. Paris: Gallimard, 1993. Print.
- Hayashi, Tadayuki. *Chuo No Bunretsu to Togo: Masariku to Chekosurovakia Kenkoku*. Tokyo: Chuo Koronsha, 1993. Print.
- Hollenbach, David. “Christian Social Ethics after the Cold War.” *Theological Studies* 53.1 (1992): 75. Print.
- Kita, Morio. *Dokutoru Manbo Seishunki*. Tokyo: Chuo Koronsha, 1968. Print.
- Masaryk, Tomáš G. *Světová Revoluce: Za Války a Ve Válce 1914-1918*. Praha: Orbis, 1925. Print.
- Meyer, Michael. *The Year That Changed the World: The Untold Story Behind the Fall of the*

Berlin Wall. New York: Scribner, 2009. Print.

Quinn, Michael L. “Havel's “Redevelopment”: Architecture, Government and the Orange Tree Theatre.” *Theatre History Studies* 13 (1993): 63-78. Print.

Sabatos, Charles. “Criticism and Destiny: Kundera and Havel on the Legacy of 1968.” *Europe-Asia Studies* 60.10 (2008): 1827-45. Print.

Sebestyen, Victor. *Revolution 1989: The Fall of the Soviet Empire*. New York: Pantheon Books, 2010. Print.

Seisho: Shin Kaiyaku. Tōkyō: Inochi No Kotobasha, 1981. Print.

Smith, Myrna J. “Editor's Choice: Caring, Community, and Transcendance – Developing Spirit To Improve Learning.” *Community College Review* 28.3 (2000): 57-74. Print.

Žižek, Slavoj. “Attempts to Escape the Logic of Capitalism.” *London Review of Books* 21.21(1999): 3-6. Print.